アラビア語モロッコ方言における接辞 “fiː-” について

谷山　ひかる
（言語文化学部　アラビア語専攻）

キーワード：アラビア語，モロッコ方言，接辞，持続性

0. はじめに

アラビア語モロッコ方言における接辞“fiː-”は、「～の中に」という空間的な意味の前置詞として用いられたり、特定の動詞に付随して慣用句的な用いられ方をしたりする以外に、他動詞の直接目的語に前接することで部分性(partialness)や動作の持続性(duration)などの意味を表すこともできる(Harrell 1962[2007]: 209 を要約)。また、Harrell and Sobelman (1966[2004])は、過剰性(excess)を示す接辞“fiː-”にも言及している。熊切(2012: 39-40)は、接辞“fiː-”にアスペクト的用法があり、この用法はアラビア語モロッコ方言を含む北アフリカのさまざまなアラビア語方言において見られる現象だと述べている。しかし、先行研究では、それらの用法を表す接辞“fiː-”の用例が少ない。卒業論文では、部分性(partialness)や動作の持続性(duration)、過剰性(excess)を表示する接辞“fiː-”を収集し、その頻出度合を年代別に明らかにした。本文中のグロス、和訳、囲み線、下線、例文番号、表番号、図番号は特に断りのない限り全て筆者によるものとする。

1. 背景知識

卒業論文の対象言語であるアラビア語モロッコ方言は、モロッコ王国で使用されている口語である。本稿でのアラビア語モロッコ方言の表記方法は、Harrell(1962[2007])に基づき、[b, bˤ, m, mˤ, f, t, tˤ, d, dˤ, n, r, rˤ, l, lˤ, s, sˤ, z, zˤ, ʃ, ʒ, k, g, x, ɣ, q, ħ, ʕ, ʔ, h]の 29 子音、[a, i, u, aː, iː, uː, e, ă, o]の 9 母音、[w, y]の 2 半母音とする。ː は長母音、ˇ は特短音を示す。

2. 先行研究

接辞“fiː-”は前置詞的用法や慣用句的用法以外に、動詞とその直接目的語の間に置かれて部分性や持続性、過剰性を示すことが Harrell(1962[2007]: 209)、Harrell and Sobelman (1966[2004]: 32)、Caubet(2008: 285)からわかる。しかし、これらの先行研究間で多少の解釈のズレがあるため、その解釈の違いを以下の表 1 でまとめる。

なお、今後、例文に出てくる他動詞の直接目的語に前接し、部分性や持続性、過剰性の意味を表す接辞“fiː-”のグロスは、FI と表示する。なお、接辞“fiː-”は単語に前接する際、その単語によって“fe, fi, f”と、発音が異なってくるため、本稿では実際の音声に従った表記をしている。

表 1 に出てくる接頭辞“ka-”について以下に説明する。なお、今後、例文に出てくる接頭辞“ka-”のグロスは、KA と表示する。

接頭辞“ka-”が未完了形動詞に付することで断続相を表す。ほとんどの他動詞において、断続相は永続する状況、長く続く状況、もしくは、習慣や動作の進行の意味を表す。

(Harrell 1962[2007]: 176 を要約)

表 1: 動詞の直接目的語に接辞 “fi:-” が前接したときの意味の現れの違い

接頭辞“ka-”＋未完了形動詞＋接辞“fi:-”	未完了形動詞＋接辞“fi:-”	完了形動詞＋接辞“fi:-”
・部分性←Harrell(1962[2007]) ・過剰性 ←Harrell and Sobelman(1966[2004]) ・持続性 ←Caubet(2008)、Harrell(1962[2007])	・持続性 ←Harrell and Sobelman(1966[2004])	・部分性 ←Harrell(1962[2007])

部分性や持続性、過剰性を示す接辞“fi:-”の用例を以下で示す。例文(1)は部分性、例文(2)は持続性、例文(3)は過剰性を表すものである。

(1) kan　ka-iherres　fe-l-luz.　<部分性>
COP.PFV.3.M.SG　KA-crack.IPFV.3.M.SG　FI-DEF-almond.M.SG
‘He was cracking (some) almonds.’
「彼は(いくらかの)アーモンドを割っていた。」
(Harrell 1962[2007]: 209)

(2) əl-bəgˤrˤa　ka-taːkŭl　f̆　ərrbiːʕ.　<持続性>
DEF-cow.F.SG　KA-eat.IPFV.3.F.SG　FI　grass.F.SG
‘The cow is eating grass.’
「その牛は草を食べている。」
(Caubet 2008: 285)

(3) u-bda　ka-yakol　fe-l-xboz.　<過剰性>
then-begin.PFV.3.M.SG　KA-eat.IPFV.3.M.SG　FI-DEF-bread.M.SG
‘Then he began to eat bread (greedily).’
「そして、彼は(貪欲に)パンを食べ始めた。」
(Harrell and Sobelman 1966[2004]: 32)

例文(3)は、接辞“fi:-”によって過剰性が表示されることを示す例である。英訳に“greedily”(貪欲に)という単語が入っているが、アラビア語のほうでは「貪欲」を意味する単語がないため、接辞“fi:-”がそれを表示していると考える。

先行研究の問題点は、部分性、過剰性、持続性を表示する接辞“fi:-”の用法の例文数が乏

しいことである。さらに、筆者は現地でアラビア語モロッコ方言を勉強した際、部分性や過剰性、持続性を表す接辞“fi:-”の用法を学んだ記憶がない。このため、接辞“fi:-”が他動詞の直接目的語に前接して部分性や過剰性、持続性の意味を表すという用法の頻出度合を明かす意義があると考える。

3. 調査

本調査では、動詞とその直接目的語の間に置かれて部分性や動作の持続性、過剰性の意味を表す接辞“fi:-”の用例を資料から抽出し、その頻出度合を調査する。調査 I では、近年(2016 年代)、調査 II では、約 20 年～30 年前(1980 年代～1990 年代)、調査 III では、約 50 年前(1961 年)での頻出度合を調べる。

3.1. 調査資料

各調査で使用する資料は以下の表 2 のとおりである。

表 2: 各調査で使用した資料

	使用した資料名	種類	テーマ	調査の対象とした記事の執筆/公開日時
調査 I	“Humans of Morocco”	インタビュー記事	日常生活	2016 年 3 月 1 日~2016 年 8 月 31 日
調査 II	“Moroccan Arabic Reader”	読本	時事	1989 年
調査 III	“A Short Reference Grammar of Moroccan Arabic”	記述集	民話	1962 年(よりも前に書かれたと考えられる。正確な年代は不明)

3.2. 調査の手順

調査 I では「動詞＋接辞“fi:-”＋目的語」、調査 II と調査 III では「接辞“fi:-”＋目的語」が存在する文を抜き出す。抜き出した文を、i)前置詞的用法 接辞“fi:-”、ii)慣用句的用法 接辞“fi:-”、iii)持続性 接辞“fi:-”、iv)部分性 接辞“fi:-”、v)過剰性 接辞“fi:-”、vi)その他、に分類する。

4. 結果と考察

本節では 4.1.節にて全調査の結果を統合して示し、4.2.節～4.4.節で各用法について考察する。

4.1. 調査の結果

全調査での接辞“fi:-”の頻出度合の結果を表 3 に示す。表 3 では、各用法における接辞“fi:-”の出現数と頻出度合も調査ごとに示している。括弧で示しているものが調査ごとの各用法における接辞“fi:-”の頻出度合である。表 3 の iii), iv), v)が本稿で対象としている用法である。

表 3: 全調査の結果

	調査			合計	頻出度の割合
	I	II	III		(%)
i) 前置詞的用法	54 (63.5%)	113 (95.0%)	96 (88.9%)	**263**	**84.3**
ii) 慣用句的用法	26 (30.6%)	6 (5.0%)	9 (8.3%)	**41**	**13.1**
iii) 持続性	2 (2.4%)	0 (0%)	1 (1.0%)	**3**	**1.0**
iv) 部分性	0 (0%)	0 (0%)	1 (1.0%)	**1**	**0.3**
v) 過剰性	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0	**0.0**
vi) その他	3 (3.5%)	0 (0%)	1 (1.0%)	**4**	**1.3**
合計	**85 (100%)**	**119 (100%)**	**108 (100%)**	**312**	**100.0**

4.2. 前置詞的用法・慣用句的用法

前置詞的用法の接辞“fi:-”の頻出度合が多く占めているという点は、全ての調査において共通していた。慣用句的用法の接辞“fi:-”の頻出度合は調査 I と調査 II・調査 III の間で開きがあった。調査 II と調査 III ではその頻出度合は 10%以下であるのに対し、調査 I でのその頻出度合は約 30%であった。調査 I だけ調査 II と調査 III に比べて前置詞的用法の接辞“fi:-”の頻出度合は低かった。これは、調査 I では動詞に後接するものに限定して接辞“fi:-”を抽出したからであると考える。調査 II と調査 III ではそのように限定することなく、接辞“fi:-”を抽出した。調査 I で出てきた慣用句的用法の接辞“fi:-”の全てが、動詞に接辞“fi:-”が後接するものであった。したがって、調査対象を動詞に後接する接辞“fi:-”に絞ったために慣用句的用法の比率が高くなったものと考える。

4.3. 持続性・部分性・過剰性

本節では、4.3.1.節にて持続性を示す接辞“fi:-”、4.3.2.節にて部分性を示す接辞“fi:-”、4.3.3.節にて過剰性を示す接辞“fi:-”をそれぞれ考察し、4.3.4.節にてそれらをまとめる。

4.3.1. 持続性

持続性を示す接辞“fi:-”は調査 I と調査 III で併せて 3 例出現した。調査 I で抽出した用例は例文(4)と例文(5)、調査 III で抽出した用例は例文(6)である。

(4) l-bnat　　ka-iʃtˤtˤbu　　fe-l-arˤdˤ.
DEF-girl.F.PL　　KA-sweep.IPFV.3.F.PL　　FI-DEF-floor.M.SG
‘The girls are sweeping the floor.’
「その女の子たちは床を拭いている。」

(5) dart bqat ka-tʕayr fi-ya.
turn.PFV.3.F.SG start.PFV.3.F.SG KA-yell.IPFV.3.F.SG FI-PRN.1.SG
‘She turned to me and started yelling.’
「彼女は私の方を向いて、(私に向って)叫び始めた。」

(6) ka-iqtel fi-hom ħetta ma-bqaw ɣir
KA-kill.IPFV.3.SG FI-PRN.3.PL until NEG-remain.PFV.3.PL only

ʒuʒ mxebyin ʕǎnd waħd el-beqqal
two hiding person.PL POSS one DEF-merchant of fatty substance.M.SG

‘He is killing them until only two hiding people, one of which is a merchant of fatty substances, are left.’
「彼は、隠遁者が二人(そのうち一人は商人)になるまで、彼らを殺し続けている。」

この全ての用例は「接頭辞“ka-”＋未完了形動詞＋接辞“fi:-”」という形をとっている。よって、接辞“fi:-”が持続性を表すには接頭辞“ka-”と共起する必要があると考える。

持続性を示す接辞“fi:-”の頻出度合は、どちらの調査においても約 1~2%と低かった。よって、持続性を示す接辞“fi:-”の頻出度合は今も昔もあまり変化はない(低い)と考えられる。持続性を示す接辞“fi:-”が今は使われなくなった、ないしは、昔よりもその頻出度合・使用頻度が低くなったとは言えない。昔から頻出度合・使用頻度の低い用法であったといえる。したがって、教育するほどのものでないと現地の教育者が考えたため、筆者が現地のモロッコで習うことがなかったのであろう。よって、学習者用参考書にはこの用法が掲載されていなかったと考えられる。

調査 II にて持続性を示す接辞“fi:-”が出現しなかった要因は調査で使用した資料の種類にあると考える。調査で使用した資料の種類において調査 I・調査 III と調査 II には違いがある。調査 I と調査 III の資料が話者の話を聞き取って記述した口語体のものであるのに対して、調査 II の資料は一人の著者が書き起こした口語体と文語体の中間のものである。さらに、調査 I の資料は仕事や家庭、学校などといった話者にとって身近な事柄を話題にしており、調査 III の資料も民話といった日々の生活に関連しているものである。しかし、調査 II の資料は時事問題を扱ったものである。こういった資料の種類やテーマが持続性を示す接辞“fi:-”の出現や頻出度合にも影響していたのではないかと考える。

4.3.2. 部分性

唯一出現した調査 III での頻出度合は 1%(108 例中 1 例)であった。

(7) ila therres bellareʒ fi-ʃi-sˤomʕa aw ʃi-ʒamăʕ,
if break.PFV.3.F.SG stork.F.PL FI-some-minaret.F.PL or some-mosque.F.PL
'If a stork breaks some minarets or mosques,'
「もし、コウノトリがいくらかのミナレット、もしくは、モスクを壊したら、」

例文(7)で気になる点は、接辞"fi:-"と直接目的語の間に「いくらかの」という意味の単語"ʃi"が置かれていることである。このため、「完了形動詞＋接辞"fi:-"＋直接目的語」だけで、部分性を表せるのかについては疑問が残る。さらに、部分性の意味を示す接辞"fi:-"はこの用例しか本調査で抽出されなかったため、部分性の意味を示す接辞"fi:-"の使用についても疑問が残る。

4.3.3. 過剰性

過剰性の意味を示す接辞"fi:-"はどの調査においても出現しなかった。したがって、筆者が調査した範囲の資料では過剰性の意味を示す接辞"fi:-"の用法は使用されていないことが明らかになった。

4.3.4. まとめ

上述したことを踏まえて、2.節の先行研究で挙げた表 1 を再検討し、表 4 にまとめる。取り消し線をつけたものは本調査で出現しなかったもの、囲み線をつけたものは本調査で出現したもの、取り消し線も囲み線もなく疑問符"?"をつけたものは本調査で出現したが、その用法の存在に疑問が残るものである。

表 4: 動詞の直接目的語の前に接辞 "fi:-"が付したときの意味の表れのまとめ

接頭辞"ka-"＋未完了形動詞＋接辞"fi:-"	未完了形動詞＋接辞"fi:-"	完了形動詞＋接辞"fi:-"
~~・部分性←Harrell(1962[2007])~~ ~~・過剰性~~ ~~←Harrell and Sobelman(1966[2004])~~ ・持続性 ←Caubet(2008)、Harrell(1962[2007])	~~・持続性~~ ~~←Harrell and Sobelman(1966[2004])~~	?・部分性 ←Harrell(1962[2007])

よって、本調査から「接頭辞"ka-"＋未完了形動詞＋接辞"fi:-"」で持続性を示す接辞"fi:-"の用法は、その頻出度合は低いものの、使用されていることがわかった。そして、接辞"fi:-"が動詞に後接して動作の持続性を表す場合には、接頭辞"ka-"が動詞に付して接辞"fi:-"と共起する必要のあることもわかった。その他の「接頭辞"ka-"＋未完了形動詞＋接辞"fi:-"」で部分性や過剰性を示す用法、「未完了形動詞＋接辞"fi:-"」で持続性を示す用法、「完了形動詞＋接辞"fi:-"」で部分性を示す用法の使用については、本調査で確認することができなかった。

4.4. その他の用法

前置詞的用法や慣用句的用法、持続性・部分性・過剰性の意味を表す用法のどれにも当てはまらなかった接辞“fiː-”の用法を調査 I と調査 III にて抽出した。

調査 I では、「接辞“fiː-”＋動名詞」で持続を表すという用法が出現した。その頻出度合は 3.0%(85 例中 3 例)であった。その用例は以下のとおりである。

(8) f-ttʒah　ujda　in　ʃa　lˤ-lˤah.
FI-go towards.VN　Oujida.PLN　EMPH　wish.PFV.3.M.SG　DEF-god
‘We are heading to Ouajda in sha’ allah[1].’
「私たちはウジダに向かっています、イン・シャー・アッラー。」

(9) f-ntdˤar　l-bdir　in　ʃa　lˤ-lˤah.
FI-wait.VN　DEF-alternative.M.SG　EMPH　wish.PFV.3.M.SG　DEF-god
‘We are still waiting for an alternative in sha’ allah.’
「私たちは代わりをまだ待っています、イン・シャー・アッラー。」

(10) kan　f-ʕtiqad-i　ʔanna　l-ʒbal　qrib.
COP.PFV.M.SG　FI-think.VN- PRN.1.SG　CONJN　DEF-mountain.M.SG　near.M.SG
‘I used to think that the way to the top was not that far.’
「私は、頂上がそこまで遠くないと前までは考えていた。」

調査 III では、意味上の格支配をする接辞“fiː-”が出現した。その頻出度合は 1.0%(108 例中 1 例)であった。

(11) a-l-muħibbin　f-en-nbi
INTJ-DEF-love.PTCP.2.M.SG　FI-DEF-Prophet.M.SG
‘Oh you love the Prophet.’
「ああ、預言者を愛するあなたよ。」

例文(11)が抽出された記述<8>の注釈は、この例文に出てくる“muħibbin”が古典アラビア語で‘he who loves, serves well’という意味であり、その後に置かれている接辞“fiː-”は、意味上の目的語である‘nbi (Prophet)’を支配(格支配)しているものであるとしている。

(Harrell 1962[2007]: 229 を要約)

[1] in sha’ allah(日本語では、イン・シャー・アッラー)は、「アッラー(神)がお望みであったら」という意味で、まだ起こっていない未来の事柄を語る時に用いられる(中田 2002: 182 を要約)。

例文(8)～例文(10)で示した「接辞“fi:-”＋動名詞」で持続を表すという用法についての記述は管見の限りないため、この用法についての調査を今後していく意義があると考える。

5. まとめと今後の課題

本調査から接辞“fi:-”が動詞に後接して動作の持続性を表す用法は、その頻出度合は低いものの、存在することがわかった。接辞“fi:-”が動詞に後接して動作の持続性を表す場合には、接頭辞“ka-”が動詞に前接して接辞“fi:-”と共起する必要性のあることが今回の調査から考えられる。接辞“fi:-”が動詞に後接して部分性や過剰性を表す用法は、本調査ではその存在を確認することができなかった。したがって、資料の年代や種類を増やせば、接辞“fi:-”が動詞に後接して部分性と過剰性を表す用例を収集できるかもしれない。

もう一つの今後の課題として、前置詞的用法や慣用句的用法、持続性・部分性・過剰性の意味を表す用法のどれにも当てはまらなかった接辞“fi:-”の用法についての調査があげられる。調査 II ではその他の意味を示す接辞“fi:-”は出現しなかったが、調査 I と調査 III では出現した。特に調査 I で出現した「接辞“fi:-”＋動名詞」で持続を表すという用法は、その用法についての記述は管見の限りないため、インフォーマント調査を行い、その用法の存在を確かめる意義があると考える。

略号一覧

1 first person 1 人称／2 second person 2 人称／3 third person 3 人称／CONJN conjunction 接続詞／COP copula コピュラ／DEF definite 定／EMPH emphatic 強調／F feminine 女性／FI 接辞 “fi:-”／IPFV imperfective 未完了／INTJ interjection 間投詞／KA 接頭辞 “ka-”／M masculine 男性／NEG negation 否定／PFV perfective 完了／PL plural 複数／PLN place name 地名／POSS possessive 所有／PRN personal pronoun 人称代名詞／PTCP participle 分詞／SG singular 単数／VN verbal noun 動名詞／- 形態素境界線

参考文献

Caubet, Dominique (2008) “Moroccan Arabic,” in: Kees Versteegh et al. (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics: Lat-pu*, vol. 3, 273-287. Leiden: Brill.／Harrell, Richard S. (1962[2007]) *A Short Reference Grammar of Moroccan Arabic*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.／Harrell, Richard S. and Harvey Sobelman (1966[2004]) *A Dictionary of Moroccan Arabic*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.／熊切拓 (2012) 「アラビア語チュニス方言のアスペクトを表示する前置詞: その統語的特徴と意味」『東京大学言語学論集』32: 37-65.／中田考 (2002) 「イン・シャー・アッラー」大塚和夫ほか（編）『岩波イスラーム辞典』182. 東京: 岩波書店.

調査資料

Feghali, Habaka J. (1989) *Moroccan Arabic Reader*. Wheaton: Dunwoody Press.／Harrell, Richard S. (1962[2007]) *A Short Reference Grammar of Moroccan Arabic*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.／Humans of Morocco. https://www.facebook.com/humansofmorocco.official/ (最終閲覧 2016/09/01)